

令和 7 年 6 月 17 日現在

機関番号：35405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K04460

研究課題名（和文）平和公園における建築とランドスケープデザインの記念表現の展開

研究課題名（英文）The Development of Commemorative Expressions in Architecture and Landscape Design at Peace Memorial Parks

研究代表者

真木 利江（Maki, Rie）

広島女学院大学・人間生活学部・教授

研究者番号：60343620

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、広島平和記念公園に関する研究を発展させ、長崎・沖縄の平和公園における記念表現の歴史的・空間的展開を明らかにした。沖縄では摩文仁の丘に始まる平和祈念と慰霊が面的に展開する姿に独自性があることを指摘した。長崎では公園の全体像の不在と地形の起伏による3箇所での公園整備にはじまり、現在も公園間の分断と、多様な造形言語の混在が継続していることを指摘した。また、戦没者慰霊の概念整理を行い、ヨーロッパの戦没者慰霊をめぐる、無名戦士の墓等の建築的表等についてその特徴を整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、記念建築やモニュメントが配された戦後の平和祈念と慰霊のための公園を、建築とランドスケープデザインによる一体的な歴史的環境として評価したことにある。また、近現代史を中心に世界的に拡大する、記念碑・記念建築物を巡る隣接領域への波及も期待される。社会的には第二次世界大戦後80年を迎え、今後の記念のあり方について、記憶の風化に対する懸念が継続し、記念と回顧のあり方が模索されている現在、平和祈念や慰霊のために建築やランドスケープに可能なことについて、その一端を示すことができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research expands upon previous studies of Hiroshima Peace Memorial Park and sheds light on the historical and spatial development of memorial expressions within the Peace Parks of Nagasaki and Okinawa. The unique characteristics of Okinawa, where peace prayers and commemorations, beginning with Mabuni Hill, have developed across the entire area were noted. In Nagasaki, the initial development of three parks separated by the undulating terrain was due to an absence of an overall master plan. This has led to continued fragmentation between the parks and a mixture of diverse design languages. Furthermore, in this study the concept of commemorating the war dead was clarified, as well as the characteristics of architectural expressions related to European war memorials, such as the Tomb of the Unknown Warrior were defined.

研究分野：建築歴史・意匠

キーワード：平和祈念 慰霊 平和公園 ランドスケープデザイン 広島・長崎・沖縄

## 1. 研究開始当初の背景

近年、都市的な文脈や景観との関係など、周囲と一体となった建築の歴史的環境を評価し、保存・活用するさまざまな試みが展開されている。こうした取り組みにおいては、複合的な観点から一体的に環境を評価する知見が必要とされている。

戦後の平和記念と慰霊は、記念建築やモニュメントが配された公園という姿で具体化されているが、一体的な歴史的環境として学術的にほとんど評価されていない。本研究は、広島平和記念公園を対象として、丹下らによるランドスケープデザインの特徴とその継承の様態を明らかにしてきた研究を発展させ、広島／長崎／沖縄の平和公園を、変化を続ける歴史的環境としてとらえ、建築とランドスケープデザインによる記念表現とその歴史的展開を明らかにすることで、一体的な歴史的環境としての評価の端緒とする。

## 2. 研究の目的

広島・長崎・沖縄の平和公園は、いずれも戦後を代表する建築家・造園家が携わった作品であるが、敷地条件や設置の背景は大きく異なっている。本研究では、沖縄平和祈念公園、長崎平和公園の建築とランドスケープデザインの構想と実施、その変遷の様相を明らかにするとともに、設計に携わった建築家・造園家による記念表現を巡る問題意識や、記念表現の特徴、その発展／継承／忘却の様相を明らかにすることを目的とし、戦後日本の建築とランドスケープデザインを一体的に評価する端緒とすることを企図する。

## 3. 研究の方法

### (1) 沖縄の平和祈念公園の変遷

沖縄の平和祈念公園については、先行研究、公園及び建築作品が発表されている雑誌記事の他、沖縄県公文書館、沖縄県土木建築部に保管されている報告書等の資料、琉球政府や国土地理院の地図等を対象に、終戦後、沖縄戦終結 50 周年を記念する整備が概ね完了する 2001 年までの平和祈念公園の変遷を扱う。

1960 年代までの変遷については、北村毅：死者たちの戦後誌：沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶、御茶の水書房、2009 等の先行研究により明らかにされている内容を整理してまとめる。1960 年代末から 1970 年代にかけて実施される復帰記念事業としての取り組みは、1967 年以降の状況を記録する最も網羅的な資料である、琉球政府『糸満町摩文仁平和公園建設計画に関するマスタープラン』（1970 年 12 月）を中心に、計画・設計に携わった厚生省国立公園局児玉技官、造園学会会長江山正美、建設省都市局公園緑地課補佐平野侃三、同技官の金子雲嶺美らの案と考え方を明らかにする。1990 年代を中心に実施される沖縄戦終結 50 周年記念事業では設計コンペにより案が決定された平和の礎と新資料館の設計コンセプトと実施案と、県による公園全体の再整備計画を扱う。

### (2) 長崎の平和公園の変遷

長崎の平和公園については、先行研究、建築作品が発表されている雑誌記事の他、長崎市土木部土木企画課、原爆被爆対策部調査課に保管されている報告書等の資料、国土地理院の地図を対象に、終戦後、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館が開館する 2003 年までの期間の変遷を扱う。

1960 年代までの変遷については、長崎の平和公園内に設けられた国際文化会館（建築：佐藤武夫、造園：折下吉延）と平和の泉（武基雄）の 2 作品を扱う。作品の掲載誌を主な対象として、当時の公園全体との関係、平和記念と慰霊の表現という観点からランドスケープデザインの特

徴を明らかにする。

次に1980年代以降の取り組みとして、1982年に検討が始まり1993年に取りまとめられた「平和公園聖域化に関する報告書」と、1994年「平和公園再整備基本計画報告書」、1996年と2003年にそれぞれ開館する長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の作品掲載誌を対象として、1980年代以降2003年までの変遷とランドスケープデザインの特徴を明らかにする。

### (3) 戦没者慰霊を巡る概念整理とヨーロッパにおける戦没者慰霊

記念碑・記念建築物に関する研究は、1980年代までは主に建築史、美術史の分野で研究が蓄積されてきたが、歴史学における研究手法の転回を契機に、これらを扱う分野が近年急速に拡大している。学際的な展開を見せる先行研究群から、主要な著作をとりあげ、戦没者記念を巡る概念整理を行う。現代の戦没者慰霊に直接つながる記念・慰霊・追悼は、18世紀末のフランス革命に始まり、第一次世界大戦（以下、大戦）において国家による記念行為として確立したとされている。大戦により新しく設けられた軍用墓地と無名戦士の墓について、イギリスの軍用墓地、パリの凱旋門、ロンドンのセノタフ、ベルリンのノイエ・ヴァッヘをとりあげ、その成立の背景と具体的な設計の特徴について、文献調査にもとづき明らかにする。

第二次世界大戦後には、これまでにない無差別かつ大量の破壊と殺戮が市民に対しても行われた結果、警告や戒めを目的とする記念碑が出現した。ベルリンの主要な記念の場であるゲシュタポ跡地に2010年に開館するトポグラフィー・オブ・テラーをめぐり1980年代から実施された3つのコンペを取り上げ、文献調査により、社会的背景と設計条件、一等作品の提案内容を整理し、各作品における建築的表現の特徴を明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 沖縄の平和祈念公園におけるランドスケープデザインの変遷

沖縄の平和祈念公園については、先行研究により、戦後まもなく摩文仁の丘に墓所としての慰霊碑・塔が設けられ、1950年代には司令官自決の地として人気の観光地となったこと、1960年代には地方自治体等により、沖縄戦を含む南方戦線の慰霊碑が並んだことが報告されていた。

1972年の復帰記念に関連する事業としての整備では、当時の日本を代表する専門家により、丘の北側に南北軸を構成の中心とする公園が整備され、公園から望む摩文仁の丘の姿が主題化された。1995年の沖縄戦終結50周年記念では沖縄県のコンペ等で沖縄の建築家の作品が選ばれ、東側の海沿いの一帯に同心円構造と新しい軸が持ち込まれた。また、全体が眺めと幾何学で緩やかに関連付けられ、現在は、戦後の面的な展開が互いにつながり合わされたパッチワークのような全体構成となっていることを明らかにし、戦後の平和祈念と慰霊の蓄積が面的に展開する平和祈念公園の姿に、沖縄の独自性があることを指摘した。

### (2) 長崎平和公園の変遷

長崎平和公園については、先行研究により、当初、平和公園として想定された広がりのうち、線路の西側、川沿いの平坦な一帯はスポーツ施設の建設が進む一方で、やや複雑な起伏をみせる東側には、爆心地公園、平和祈念像と広場、国際文化会館一帯の3箇所が整備されることになるが、全体像の不在が指摘されていた。

1960年代までの主な建築である国際文化会館と平和の泉は平和公園の全体像が不明瞭な状態で計画され。掲載誌では両設計者ともに慰霊・平和記念について多くを語らないが、ともに周辺環境や地形、既存施設が持つ軸を顕在化するように設計が行われ、中心的な外部空間として、周辺から隔離され水を中心とする外部空間を具体化していたことを指摘した。1980年代以降、中心地地区と記念像地区の2地区の目的の明確化が図られ、中心地地区では中心性による祈りの

場が、祈念像地区では尾根に沿った長軸性による願いの場が提案された。国際文化会館の敷地に新築された原爆資料館と新設の平和祈念館はいずれも全体が地下を中心とする施設となった。原爆資料館では、公園との一体化と、造形要素の並置を平和の図式化とする概念的な表現に変化した。平和祈念館では、周辺から隔離され水を中心とする外部空間の構成が採用され、祈念館と爆心地との関係が空間化された。軸・川・動線により各地区を結ぶことが試みられたが、高低差や道路により分断され、多様な造形言語が並置・混在する複雑な様相が継続していることを明らかにした。

### (3) 戦没者慰霊を巡る概念整理とヨーロッパにおける戦没者慰霊

概念整理にあたっては、先行研究におけるモニュメントとメモリアル、記念・祈念・慰霊・追悼の用語の定義と、死生学における一般的な死、非業の死、戦争死の位置づけを整理した。

エドウィン・ラッチェンスらを中心に設計が進められたイギリスの軍用墓地は、敷地を低い塀や生垣で囲い、その中に画一的な墓石を並べ、「追憶の石碑」と「犠牲の十字架」が記念碑として設置されることで、墓地の風景の中で十字架の垂直性と石碑の水平性が対照をなすことで、イギリスの戦没者墓地に統一性と多様性をもたらしている。無名戦士の墓は、フランスでは既に国家的式典の焦点となっていた戦勝記念の凱旋門の床下に加えられた。イギリスでは凱旋パレードの敬礼対象として棺台が設計され、これが常設版へ置き換えられた。ドイツでは同じく戦勝記念のノイエ・ヴァッへの内部が、天窓が穿たれた一室空間としてつくり変えられた。結果的に、いずれにおいても新古典主義と棺・墓石・墓・リースなど伝統的な葬送のモチーフが組み合わせられ、都市中心における国家的式典の焦点として扱われることとなった。

トポグラフィー・オブ・テラーを巡る3回の設計競技では、ゲシュタポ跡地であるというこの敷地の重要性・特殊性が、1987年の仮設展覧会に向けた準備を通して、ベルリンという都市の歴史の中で、戦後の忘却を含めて捉え直されたことが重要な意味を持った。敷地とその歴史の特殊性については、いずれのコンペでも強く意識されたが、第1、2回コンペではこれまでの枠組みを外して考えること・超えることが目指され、建築やランドスケープの本質的で根源的なあり方を問い直すことで回答することが目指された。一方で、瓦礫の撤去・工事の中断と膠着を経た第3回コンペでは、敷地は痛ましい都市の空白として捉え直され、メッセージ性のない中立的な建築表現が目指されたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 真木利江	4. 巻 47
2. 論文標題 トポグラフィー・オブ・テラーをめぐる3つの設計競技	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本建築学会中国支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 938-941
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真木利江	4. 巻 45
2. 論文標題 ヨーロッパにおける軍用墓地と無名戦士の墓の成立	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会中国支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 891-894
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 真木利江
2. 発表標題 1980年代以降の長崎平和公園におけるランドスケープデザイン
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 真木利江
2. 発表標題 丹下健三による慰霊と平和祈念のランドスケープデザイン
3. 学会等名 日本建築学会近畿支部若手研究部会「昭和建築とランドスケープの関係史」公開勉強会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 真木利江
2. 発表標題 長崎国際文化会館と平和の泉のランドスケープデザイン
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 真木利江
2. 発表標題 沖縄戦終結50周年の平和祈念公園におけるランドスケープデザイン
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関